産育書の言葉東西

米谷　隆史

一　「ホントウ」という語

一般に「本当」と書くこの語は、語源や成立が良くわかっていない。まずはこの語が文献上に姿を見せる一八世紀後半の用例を確認しよう。

＊引用に際しては、濁点や句読点、訓を補い、漢字を当てたり、自明の振り仮名を削除する他、仮名遣いを改める等の改変を行っている。但し、傍線部は原文通りである。以降の引用も全て同じ。

1「ほんとふの事をいッてくれなんし」
『大通秘密論』安永七（一七七八）

2「本とでおさァ」
『廻覧奇談深淵情』安永八（一七七九）

3 ゑん二郎は、はじめて世の中をあきらめ、ほんとうの人となり　『江戸生艶気樺焼』天明五（一七八五）

まず、現代風に「本当」と表記される例は見当たらない。それから、1と2のように、会話部分での用例が多く、3のような地の文での用例は少ない。また、1と2は洒落本、3は黄表紙と称されるジャンルの文学作品であるが、いずれも江戸で出版されたもので、そこに反映しているのは、おおかた江戸の言葉である。同じ時代の京阪地域の言葉を反映する文学作品では「ホンマ」は見えるが、「ホントウ」を見つけるのは案外に難しいのである。こうしたことから、この時期、「ホントウ」は、漢語らしい漢語とは意識されていなかったらしいこと、話し言葉的な性格を持っていたらしいこと、関東・関西のどちらかと言えば関東で良く使われていたらしいこと、といった、現代を生きる我々でも、そう言われてみれば確かにそんな気もする、と思い当たるような傾向を既に備えていたとも見ることができる。但し、3の「ほんとう」は地の文で用いられており、単純に割り切れないところが残ることも付け加えておこう。[1]

そうした中、最近、次のような用例が目に入った。安永六（一七七七）年刊行の産育書『産家やしなひ草』の一節で、腹帯を締め付けすぎることの難点を指摘する部分である。

4 産に臨んでも、日頃かたよりたる癖なれば、ただ其方へばかり撐かけ、ほんたうに向かわず、難産に及ぶ

者多し。

同書の中で「ほんたう」が見えるのはこの一箇所のみ。[2] この時代の書物は濁点を周密には付さないことがあるので「ぼんだう」や「ほんだう」に当たる語を記している可能性も皆無ではないし、「ほんとう」と「ほんたう」の仮名遣いの違いもやや気になるところではある。ただ、この頃の「ホントウ」は、単なる「その通り」という程度の意味だけではなく、「それにふさわしい状態」というような実質的な意味を担って用いることがあったとされる。例えば3は、紆余曲折を経た「ゑん二郎」がまっとうな人生に戻り、ということを記しているので、まさにその後者の意味で用いられているわけであるが、4の例もここの文脈に沿って解釈するならば、3と同様、胎児の姿勢としてふさわしい状態を意味する「ホントウ」と見てよいだろう。

『産家やしなひ草』は、大阪は堺出身の医師 佐々井玄敬の著作である。また、この書物に序文を寄せている師匠の賀川玄悦も彦根出身で主に京都で活躍した産家医である。つまり、4の一節によって、関西語圏でも「ホントウ」が用いられていたことが知られるのである。

当時の正式な医学書は、漢文か、それを書き下した調子の固い文章で記されるのが当たり前であった。その点、『産家やしなひ草』はわかりやすい文体での記述を意図したもので、その経緯を師匠の賀川玄悦が寄せた序文では次のように説明している（この部分、漢字の左側にもルビがあるので、それを漢字下の（）内に記した）。

5 文（ブン）、女字（ジョジ）（ヒラカナ）を用い、辞（コトバ）、鄙俚（ヒリ）（ゲスヂカキ）を避ざるは、閨女（ケイジョ）（ムスメ）室人（シツジン）（ナイシツ）の耳目（ジモク）（キキミル）に便（ベン）（カッテ）ならしめんと也。

また、著者の佐々井玄敬自身も本文の冒頭近くで次のように記している。

6 産前後の心得と成るべきあらましを、おろかなる賤（しず）山（やま）がつ、潜（かず）きの海女（あま）のみるめにも通（つう）ぜむこと事を思ひて、言葉の卑しく、繰り言がちなるを択（えら）ばず記す

要するに、学問修行の十分でない女性達にも容易に理解できるように、漢字平仮名交じりで、俗っぽい（「ゲスヂカキ」は、下衆近き である）言葉の使用や繰り返しを厭わず、わかりやすく記した、ということである。当時の関西の文献には珍しい「ホントウ」が出版物に記された要因は、多くの女性が直面する出産という一

大事に関わるハウツーを、噛みくだいて説明しようとする動機に基づくものと考えられる。

二　東北の産育書の言葉

『産家やしなひ草』に見える「ホントウ」を、文字に記すとなるとちょっと躊躇する言葉が、想定された読者層に対する配慮という追い風を受けて文章に記された例として理解してみた。『産家やしなひ草』には他にも珍しい語が用いられているのか、こうした配慮は産育書特有のものといえるのか、等々さらに考えるべきところは多いが、ここでは、他の地域で刊行された産育書に類似の事例がないかに話を向けることにしよう。まずは東北地方から。

江戸期を通してみると、商業的な出版事業は、江戸・京都・大阪の三都に名古屋を加えた四地域に資本が集中している。東北地方の中では、仙台が出版の盛んな地域として知られているが、そうした専門の書肆（出版社）だけが書物を刊行したわけではなかった。身分を問わず有徳の者が、色々な手段で出版費用を工面し、刊行した書物を地域や関係者へ配布する「印施」という形態が全国で広く行われており、東北地方でも印施によって刊行された通俗的な医書が何本か存する。山形の医師 阿部三省の遺稿として、門人の渋江太亮等が刊行した嘉永三（一八五〇）年刊行の『産家教草』もその中の一本である。[3] 序文の冒頭を次に示そう。

7 産は婦人の常といへども、深淵に臨が如き大厄なり。軽き者は薬を用えずとも平産し、重きに至りては薬を用えても救ふ事能はず。然る時は薬と術と兼て施さざれば救ひ難し。…中略…元より婦人の読安からんことを要とすれば、仮字、里言葉を以てしるし…以下略

傍線部分に着目していただきたい。「用えず」と「用えて」は本来ならば「用ひ（い）ず」や「用ひ（い）て」とあるべきところ。これは、彼の地の方言では、エがイにごく近い音で発音されることを反映したものである。また、「術」の付訓の「じゅつ」も、語頭以外のカ行・タ行音が濁音化する東北方言の発音に従って濁点を加えた例といえる。さらに、方言の反映ということであれば、次の部分も興味深い。

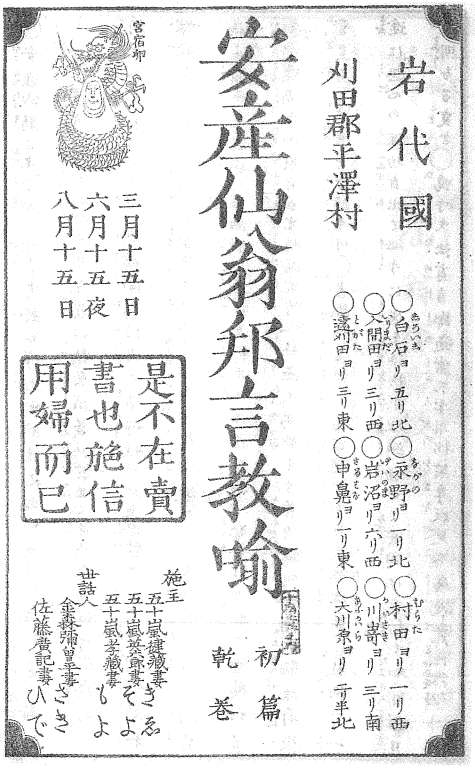
8 出乳汁好食　冬瓜繁蔞干瓢　木通芽此地にてあけびのめをいふ　鯉

「きのめ」は不特定の木の芽を表す他、山椒の芽の意味でも用いられるが、ここではアケビの芽を指してい

る。アケビの芽を「きのめ」と称するのは、東北地方に広く見られる方言である。(4)

出版物では通常避けられる、方言の発音に則した仮名表記や「きのめ」のような地域性の顕著な語の使用は、7に引いた序文で「元より婦人の読安からんことを要とすれば、仮字、里言葉を以てしるし」と述べる方針に基づくものと考えられる。ただ、方言であることを銘記している「きのめ」はともかく、「用えず」や「術」は、筆者自身が方言と気づかずに不注意で非標準的な表記を採ってしまっただけではないのか、との解釈もありうる。だが、右のような方言の発音に則した仮名表記は、実は、この序文とそれに続く本文のごく最初のところには目立つが、以降はほとんど見えなくなる。通常、序文は本文よりも注意深く記されるはずなので、不注意による誤りと考えるよりは、冒頭近くにわざと訛りを入れることで、読者や音読された本文を聞く人が内容に親しみを感ずる効果を狙ったものと考えておきたい。

さらに、やや時代は下るが、明治二（一八六九）年に刊行された『安産仙翁邦言教喩』はもっと徹底している。(5)この書物は仙台の書肆伊勢屋が出版を請け負っているが、表紙に「是不在売書也。施信用婦而已」（下図参照）とあることから、商品ではなく、信の置ける



女性に無料で配布されたものである。同じく表紙によると、費用は、平沢村（現在の宮城県蔵王町）の農婦五十嵐建蔵妻きゑ他、全三名が施主（発起人）となって工面したものらしい。こちらも、まずは序文の冒頭を示す。

9　安産仙翁の老婆心に邦言書綴施孕婦救欲志起趣は…

「おぼこ」は赤ん坊、「なし」は「無し」ではなく「成し」なので「安産仙翁」はさしずめ出産の守り神であろう。「邦言」は、ここの序文には「べいちゃあことば」

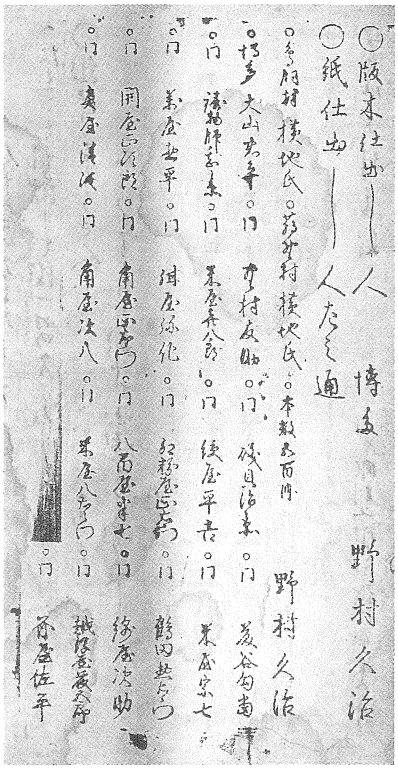
の訓が、本文冒頭にある書名には「なまり（訛り）」の訓が当てられている。「べいちゃあ」は仙台地域で「～しよう」という気持ちを強く述べる時に用いる方言なので、すぐ後の「おせべいちゃあとおもったわけは」は「教えようと思った理由は」ということになる。「べいちゃあことば」は、関東辺りの「べい」を良く使う方言を「べいべい言葉」と称することがあるのに倣って、特徴的に聞こえる「べいちゃあ」を自らの方言の代表として用いた造語であろう。序文ではこの後に、方言を交えて記した理由を、当地各村々の助産をする女性に産育に係る心構えを知らせようと考えた故と述べている。早速「べいちゃあことば」で記された本文を見てみよう。

10 夫懐胎は固病に非譬草木実結熟落如じ然雖難産或急変等有惟は嗚呼婦の危勤而諺謂舟乗或男の戦に赴如然。死生境の大儀也。…以下略…

漢字に対する付訓が相当な意訳で少し理解に手間取るが、「やまへ」「たへやく」「さむらへ」「だへじ」はそれぞれ「やまい（病）」「たいやく（大厄）」「さむらい（侍）」「だいじ（大事）」である。ここでも東北方言のイとエとの近さが仮名表記に反映している。また、「はらぴと」は東北方言で「妊婦」のこと、「ゑむ」は「実が熟すること」で関西地方以東では各地に見られるが、標準的な意味ではないと推測されるので、やはり地域性を帯びている。このように『安産仙翁邦言教喩』の表記と語彙の選択には、先に見た『産家教草』と同様の配慮がより徹底して実現されている様を見ることができる。女性達の発起による書物刊行への意気込みが強く伝わってくるようだ。

三　九州の産育書

さて、最後は九州。残念ながら、これまでに目に入った産育書は一本のみ。弘化三（一八四六）年刊行の『安産手引草』、博多の横地見硯の述作である。[6] 最終丁表に「彫刻工はかた川ばた越後屋藤五郎」、同じく裏に「版木仕出し人 博多 野村久治」とあり、さらにその後に「紙仕出し人左之通」として鳥飼村（現在の福岡市）や博多の人々の名が計二十四名列挙される（次頁図参照）。版木作成費を野村久治が、印刷の料紙費を列挙の二十四名が出資したということで、前節で言及した東北の二本と同様、博多の人々が中心となっての印施である。



序文によると、「産の道に委敷医者衆の説を集め」、「近頃産婦の心得違ひになりたる悪しき仕癖を書あらため」てとりまとめた書物である。女性読者のために、とまではことわっていないが、これまでに見てきた産育書と同様の趣旨で編述されたものであろう。文章は全体に標準的な表記が採られ、九州らしい訛りを反映するところはほとんどないが、この書物の中にも、通常の出版物に見えない語が散見される。

11 産気づきしとおぼゆるときは、手ばやく髪に油をつけ、張り金をも除てつぐり置べし。

12 大小用するとて腰を伸して起べからず。両手をつきて起、始終うつむいて静に便器にかかるべし。

11の「つぐり」は動詞「つぐる」の連用形であろう。「つぐり」は元来、松ぼっくりの意。四国や九州で糸や縄、髪などを巻いて束ねたものを「つぐり」や「つんぐり」という地域があるので、これの動詞形と考えている。他に江戸期の用例を見ない。12の「おかを」は病人用の便器、おまるのこと。「おかわ」の語形では全国で見られ、先に見た『産家やしなひ草』にも「うつむきめに成てしずかに便器(左のルビに「おかは」)に居るべし」と見えるが、「おかお」の語形では島根や天草での近現代の使用が報告されるものの、やはり江戸期には用例を見いだすことができない。この他、「産前産後ともによろし」とされる食物の中に見える「せんぶき」(浅葱)、「たちはき」(ナタ豆)、「あかいも」(唐芋)、「よろしからず」とされる食物に見える「茸」(キノコ)、「がめ」(すっぽん)なども、九州や四国を中心に用いられる方言である。『安産仙翁邦言教喩』のようにあからさまに訛りを反映させる書物を見てしまうと、九州でもあの位のものがあれば、と、少し残念に感じたりもするのだが、九州の方々の感想はいかがであろうか。いずれにせよ、想定される読者に合わせた工夫を行うなかで、標準的でない語や語形を採った書物を刊行することは、東北だけではなく、九州でも行われていたことがわかる。

四　最後に

今回は産育書を中心に話を進めたので、本稿だけを読むと、言葉の上で非標準的な面を含む書物の刊行は女性向けのものに限られると解されるきらいがある。しかし、実際は、地域で刊行された教訓書や啓蒙書の中には性別を問わず読まれることが期待されている書物が多数あり、少なくとも東北に限れば、そうした書物の中にも右で紹介したのと類似の事例を多数見ることができる。この点は誤解の無いよう付け加えておく。

近世の地域社会においては、生活上の重要な知識・倫理等を地域の人々で共有するために、費用を集め、時には標準的な文章語の規範から逸脱した仮名表記や語彙を敢えて選択しながら書物を編集、出版することがあった。こうした営みは、社会思想史や出版史の上から注目されるのは当然として、地域の言語文化史を研究しようとする際にも貴重な論点を与えてくれるものと考えている。なお、蛇足ながら、高校生までを東北で過ごし、その後、大阪北部居住の折に阪神大震災に遭い、この二十年程は熊本に住む筆者自身としては、災害時の方言に関わる各種の支援も、つい思い合わされるところである。(7)

【引用に参照したテキスト】

『産家やしなひ草』（京都大学蔵本。京都大学貴重資料デジタルアーカイブの掲出画像に拠る）／『産家教草』『安産仙翁邦言教喩』『安産手引草』（拙蔵本に拠る）／1・2は洒落本大成、3は日本古典文学大系

【注】

（1）江戸期の「ホントウ」の意味については、市村太郎（二〇一四）「副詞「ほんに」をめぐって―「ほん」とその周辺―」（『日本語の研究』一〇―二）を参考にした。

（2）『産家やしなひ草』は師の賀川玄悦による『産論』『産論翼』に依拠しているが、この二書の腹帯に関する記述部分にも「本当」や「本道」のような語は見えない。

（3）『産家教革』については、『山形市史』（中巻近世編、一九七一）に紹介がある。

（4）東北地方の文書等に見える言語的な地域性については作田将三郎の一連の研究が備わる。最近のものには（二〇一八）「地方語文献に見る方言語彙」（『シリーズ〈日本の方言〉8 方言の語彙―日本語を彩る地域語の世界―』朝倉書店）がある。

（5）『安産仙翁邦言教喩』の言語に見える地域性については夙に山本淳（二〇〇四）「宮城県立図書館所蔵『安産仙翁邦言教喩』に見られる音韻現象」（『米沢国語国文』三三）が詳述するところである。

（6）『安産手引草』の出版背景等については、中野三敏編（二〇〇一）『九州の出版文化 江戸後期における地方出版文化』（福岡大学図書館特別展図録、福岡大学図書館）に拠る。

（7）こうした面の研究は、近年急速に広がりを見せている。最近のものでは、小林隆・坂喜美佳（二〇一八）「社会支援と方言語彙」（『シリーズ〈日本の方言〉8 方言の語彙―日本語を彩る地域語の世界―』朝倉書店）がある。

＊本稿には、米谷隆史（一九九三）「特集・近現代語の語源「本当」（『日本語学』一二―七、明治書院）及び、米谷隆史（二〇一四）「往来物に見る方言反映事例について―近世後期の東北地方における―」（『熊本県立大学文学部紀要』二〇）の内容を受けて記している部分がある。

＊本稿は、科学研究費補助金（課題番号 26580084）「東北の近世版本に見られる方言反映事例の発掘と評価」の助成を受けたものである。